

24
2014. 5

薬友会報

千葉大学薬友会



タイ王国チュラポーン王女来学



香港浸會大學との学部間協定調印

薬友会長・研究院長挨拶	2
退任のご挨拶	2
新任教授ご挨拶	4
会員便り	5
卒業生（留学生）から	7
薬学部この一年	8
研究室便り	10
クラス通信	15
支部便り	19
サークル紹介	19

学部だより	21
教員の異動	21
薬学部入学者の状況	21
大学院医学薬学府入学者の状況	21
薬剤師国家試験合格状況	21
卒業生・修了生の進路	21
今年度の受賞記録	22
薬友会より	22
叙勲のお祝い	23
薬友会SNSのご紹介	23
薬友会生涯教育セミナー	24
編集後記	24

薬友会長・研究院長挨拶

高山 廣光



荒野泰前薬学研究院長から「たすき」を受けとり、亥鼻山の「The Long and Winding Road」を2年間走ることになりました高山と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。光陰矢の如しと言いますが、私が千葉大学薬学部を卒業してから既に37年が経過しました。この間、大学院博士課程設置、国立大学法人化、大学院重点化による薬学研究院と医学薬学府の設置、薬学教育6年制課程のスタート、教育カリキュラムの見直し、入試の多様化、大学院再改組、西千葉地区から亥鼻キャンパスへの移転などを経て、我らの学び舎は絶えずその姿を変えながら薬学教育・研究の拠点形成を目指し歩んでまいりました。しかし今、「Let it be」と口ずさむゆとりはなく、さらなる高みを目指しての「全力疾走」が社会から求められています。

昨年終わりに文部科学省が策定した「国立大学改革プラン」によりますと、われわれ国立大学は、社会の变革を担う人材の育成やイノベーション創出といった役割を果たすために早急に機能強化に取り組んでいくことが強く求められています。そのためのミッションの再定義（各国立大学と文部科学省が意見交換を行い、研究水準、教育成果、産学連携等の客観的データに基づき、各大学の強み・特色・社会的役割を整理）が行われ、今後、それぞれの大学（学部）の強みや特色を伸ばし、その社会的役割を一層果たしていくための機能強化を図っていくこととなります。千葉大学薬学部でもこの大方針に沿って、これまで培ってきた強み・特色（例えば、医療系3学部と附属病院が連携して行う専門職連携教育、伝統ある植物科学・天然物化学、薬物動態学・毒性学、製剤学などを基盤とした創薬研究）の推進に加え、英語教育プログラム等を強化することによる国際創薬研究者の育成、大型研究プロジェクトの創始、医薬看連携による亥鼻治療学拠点の形成、さらに薬剤師の生涯教育や薬剤師会等との連携による社会的課題等への対応を進めてまいりたいと考えています。況や、学部大学院の学生諸君がじっくり学び研究に専念できる環境作りにも努めて参ります。

研究院長拝命以来「任重くして道遠し」の想いですが、この重要な改革期にあたり薬学部全教職員は一致団結して、グローバルに活躍できる薬学研究者並びに優れた薬剤師を育成することに全力を尽くしていきたいと考えております。薬友会会員の皆様のお力添えは何よりも心強いものでございます。今後ともご支援・ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げますとともに、千葉大学薬学部生涯教育セミナー、薬友会総会などで会員の皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

退任のご挨拶 お世話になった46年間

石川 勉



私は、1968年に千葉大学薬学部に入學し、大学院中退後職員となり、この2014年に定年で退職します。これまで、学生として4.5年そして職員として41.5年の計46年間千葉大学薬学部にお世話になりました。4年次には、故池田仁三郎教授が主宰され、故石井永助教授、村上泰興助手（現、東邦大学名誉教授）、故細谷勝弘教務職員の先生方がおられた薬品製造学研究室に配属されました。その後、教務職員（文部技官）を経て1978年に助手に昇任させて頂きました。1988年には石井先生が教授に昇任され、原山尚先生（現、岡山大学名誉教授）が助教授として加わったことで、翌年10月からOxford大学Dyson Perrin LaboratoryのLaurence M. Harwood博士（現、Reading大学化学科教授）のグループで博士研究員として充実した15ヶ月間を過ごさせて頂きました。帰国後の1992

年助教授に昇任させて頂きましたが、1995年には既に私の留学当時から体調を崩されていた石井先生が、定年を約2年残して休職されました。幸運にも1996年には教授に昇任させて頂き、これまでの研究の継承に加え、「いつか製造からくすりを」と、そして「教科書に載るような反応を」を合言葉した、創薬化学的および基礎化学的展開を目指しました。具体的には、「プエラリア」をはじめとするタイ産薬用植物の成分研究とグアニジン・ケミストリーをタイの先生方や白鳥製薬さんのお力を得て新たに展開することが出来ました。

研究の遂行では、海外を含む多くの方々のご協力・ご支援を頂きました。特に、ここまで辿れたのは、研究への情熱や姿勢だけでなく研究室の管理・運営のノウハウを教えて頂いた恩師石井先生、そして夜遅くまで精力的に実験された学生さんや強力にサポート下さった先生方、薬品製造学研究室の素晴らしい仲間、のお蔭です。また、柄にもなく部局長も仰せつかり、医学薬学府の設置、亥鼻キャンパスへの移転、薬学部6年制の導入、薬学部120周年記念事業、等大きな環境変化に対応せねばなりませんでした。その時々で先生方や事務部の方に助けて頂き、何とか乗切ることが出来ました。学部の学生さんとは、有機化学小テストのコメント欄で楽しくコミュニケーションさせてもらい、良い思い出です。

今振り返って、山あり谷ありで、学部の発展にどれだけ貢献出来たかは甚だ疑問ですが、ずっと母校で過ごせたことは、この上なくハッピーでしたし、大きな誇りです。ここにお世話になった方々に改めて感謝申上げるとともに、千葉大学薬学部の益々の発展を大いに願い、そして、強く信じております。本当にありがとうございました。



退任のご挨拶 高齢者薬剤学を去るにあたって

上野 光一



私は昭和43年に千葉大学薬学部に入學し、卒業研究と大学院修士課程は薬品化学教室で過ごしました。恩師の原田正敏先生からは生薬薬理について学ばせて頂きました。大学院修了後は、民間会社の薬理研究室でいくつかの新薬創製に関わらせて頂きましたが、入社5年目に北川晴雄先生の導きで薬物学研究室の教務職員として採用されました。それ以来、この3月末で退職するまでの35年間、学部が丸となり亥鼻移転をはさんで大きく発展してきた本学部の輝かしい時代を共に過ごし、共に協働できたことを心から光栄に存じております。

薬物学研究室では、薬物代謝が医薬品の有効性と安全性に深くかかわることを明らかにする研究に従事しました。平成9年には矢野眞吾教授の薬物治療学研究室へ移籍し、薬剤師教育に関わることになりました。平成13年からは高齢者薬剤学研究室を担当することとなり、臨床と連携した高齢者薬物療法の教育と研究を行うように命じられました。人は生まれていきなり高齢者になるわけではなく、高齢者の病気は今日に始まったことではありません。長い潜伏期間があり、生活習慣の乱れが肥満、高血糖、そして動脈硬化につながり、プラークを作り、梗塞や塞栓を起こすまでに長い年月がかかります。高齢者の病気を防ぐには予防が大切であり、30年後を考えた健康づくり、健康増進が大切です。そう考えた時、高齢者薬剤学で行う研究とはその時間軸を考えた病因探索と個人差を考えた薬物療法であろうと思に至りました。求められていることは肥満対策であり、糖尿病対策であり、がん対策です。乱れた食生活の栄養補給としてのサプリメント研究の意義もそこにあるでしょう。それ以来、抗がん薬、個別化医療、骨代謝性疾患、性差医療、予防医学、臨床疫学、痒み、ハーブ・サプリメントの研究など多彩な研究テーマを開拓し、学生たちとともに楽しい時間を過ごさせて頂きました。

一方、平成4年の医療法の改正で、薬剤師が医療人と認められたことを契機に「薬剤師卒業後教育研修講座」を本年まで毎年開催して参りました。この間、薬友会の諸先輩方には何度も励まされ、多大なるご支援を賜り、今日まで継続することができました。薬友会の皆様方に心から感謝申し上げます。

最後になりますが、千葉大学入学以来46年間千葉大学が私の心のふるさとでした。35年間お世話になり、本当にありがとうございます。千葉大学薬学部が益々発展することを切に願っております。



退任のご挨拶 少年易老學難成

山本 恵司



教員として38年間勤務させていただきました。最終講義で最初のスライドに示させていただきましたが「少年易老學難成 一寸光陰不可輕 未覺池塘春草夢 階前梧葉已秋聲」の心境です。遠い昔から、このように表現されているのですから真理なのだと思います。時間は経過してしまえば「あっ」と言う間です。このことを65歳になって深く実感しております。しかし、だからといって夢見心地で38年が過ぎたとは思っておりません。良く働いたという充実感があります。教育研究では総合科学である薬学の中で、千葉大学にしかない物理化学を基盤とした製剤工学という看板を背負って活動をさせていただきました。わが国でのこの領域のパイオニアである仲井由宣先生から引継いだプレッシャーを、ポジティブに自分なりに前向きに変換し優れた人材を社会に輩出できた

ことは無上の喜びです。私と製剤工学研究室で教員仲間として仕事をした全員（32歳の若者は除いて）6名がそれぞれ現在、大学の教授として頑張っていることは頼もしい限りです。また、薬学部の管理運営の中心である教授会に約37年間参加し、長きに渡り多くの方と協働して仕事をさせていただきました。西千葉の会議室で初めて教授会に参加した時の学部長は山岸三郎先生だったと記憶していますが、末席からタバコの煙の遠くに見える学部長席で博士課程設置の議論をおまとめになっていた姿が印象的でした。その後2回の日本薬学会開催、100周年、120周年、亥鼻移転、学部6年制移行、大型予算獲得、秋入学実施と変わらない薬学部も改革が続いたことを改めて思い知らされます。これからは、まさに国立大学大逆風の時代を迎えます。国家財政の危機は、125年の歴史と伝統ある千葉大学薬学部の教育を吹き飛ばしかねない勢いで迫っています。より高度なグローバル人材を養成すること、私なりの言葉で表現すると、世界を舞台にして医療を、医薬品の創製を牽引できる人間力のある若者を、大学院を中心として育成する任務を果たすことが要請されています。大震災をはさんだ最後の6年間は本務を大学理事として務めさせていただき、ストレスフルではありましたが貴重な経験をさせていただきました。千葉大学の栄えある発展を心より祈念し、薬学研究院の皆様がより一層協力して歴史と伝統を、継承・発展させることを期待しております。



新任教授ご挨拶

樋坂 章博



略歴

昭和59年 北大院・薬修・修了、万有製薬株式会社勤務、東京大学22世紀医療センター特任准教授を経て現職

平成25年4月1日付けで千葉大学大学院薬学研究院 高齢者薬剤学研究室 教授を拜命致しました。本研究室は平成9年に開設された薬物治療学研究室に端を発し、平成13年に現在の我が国において率先して取り組むべき課題であり、その要請に先駆けて挑戦し、多様な問題を解決された先任の上野光一教授に敬意を表するとともに、薬の効果を高齢者などの患者の状態に合わせて最大化する、そのような研究を引き継ぎ発展させたいと考えております。とは申しても経験不足で力の及ばない点だけですが、皆様のご支援、ご鞭撻を伏してお願い申し上げます。

私は北海道大学大学院薬学研究科にて修士課程を修了後、万有製薬(現在のMSD株式会社)に入社し、以後21年間、薬物体内動態の企業研究者として活動しました。その間、東京大学薬学部の杉山雄一先生のご指導で学位を取得し、そのご縁で杉山先生のもとで助教授を務められた鈴木洋史先生が、東京大学医学部附属病院薬剤部教授に就任された機会に、講師として東京大学に移りました。その後、寄付講座の薬理動態学講座の開設に伴い、特任准教授を務めました。東大病院には9年間在籍したことになります。現在は本学部教授としてご活躍の関根祐子先生と伊藤茂成先生とは、病院薬剤部で同僚としておつき合い頂いたので、私は

千葉大学に非常な親近感を覚えています。これには、千葉寛先生を始め、これまで本学は非常に優れた薬物代謝、薬物動態分野の研究者を輩出してきたということもごさいます。

私の研究テーマは、薬物体内動態および薬効のモデリング、臨床薬理学、医薬品開発論などで、より具体的には薬物相互作用の解析、疾患モデルの構築などであり、最近では薬物相互作用のガイドライン策定をお手伝いしました。またアルツハイマー病進行のモデル化にも取り組んでいます。経歴からお気づきかもしれませんが、私は研究は大好きですが学問一筋ではなく、創薬、臨床開発、承認申請、あるいは医療を実際に経験し、現場を肌で感じた点が今となり大変良い経験となっております。これからはその経験を学生に伝えつつ、本学の素晴らしい実績を継承して有為な人材の育成に微力を尽くす所存であります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

主要論文

- A. Hisaka, Y. Ohno, T. Yamamoto, H. Suzuki. Prediction of pharmacokinetic drug-drug interaction caused by changes in cytochrome P450 activity using *in vivo* information. *Pharmacol. Ther.* 125, 230-248 (2010).
T. Kudo, A. Hisaka, Y. Sugiyama, K. Ito. Analysis of the repaglinide concentration increase produced by gemfibrozil and itraconazole based on the inhibition of the hepatic uptake transporter and metabolic enzymes. *Drug Metab. Dispos.* 41, 362-371 (2013).



新任教授ご挨拶

森部 久仁一



略歴

平成6年 千葉大院・薬修・修了、帝京大学薬学部助手、千葉大学大学院薬学研究院講師・准教授を経て現職

平成26年4月1日付けで千葉大学大学院薬学研究院教授として製剤工学研究室を担当することになりました。昭和44年に日本で唯一の「製剤工学」の看板が掲げられてから今年で45年の歴史を持つ研究室です。製剤研究はほとんどの製薬会社で行われているものの、その専門家を養成する物理薬剤学・製剤学関連の研究室は国公立大学でも数研究室しかありません。製剤工学研究室では、初代仲井由宣教授(現千葉大学名誉教授)、2代目山本恵司教授(現千葉大学名誉教授)と分子レベルで製剤を科学的に評価する分子製剤学の視点に立った研究を長年に渡って行ってきており、これまでも多くの製剤研究者を輩出してきました。私は仲井教授、山本教授が築き上げてきた分子製剤学の視点に立った研究を継承し、今後も製剤開発や品質保証の分野に貢献していきたいと思っております。

現在の主な研究テーマは「難溶性薬物の溶解性改善とその評価方法の開発」で、具体的には薬物複合体(包接化合物・共結晶)、固体分散体、薬物ナノ粒子の調製と物性評価に関する研究を行っています。医薬品製剤は多成分混合系であり、その評価には複数の物性測定に基づくデータの解析が必要です。製剤の物性測定法を一通り把握した上で、論理的・科学的思考に基づいてデータを解析し、実際の製剤の評価ができる学生を輩出していきます。また、産官学との共同研究も積極的に行い、社会からの要請に応えられるような研究室にしていきたいと思っております。

情報が氾濫し社会状況の変化が著しい昨今では、状況に流されずに自分で物事を考え自分の意見を述べられる人材が求められます。論理的・科学的思考やコミュニケーション能力は短期間での習得は困難で、研究室での研究活動や集団生活を通して経験を積むのが最適です。グローバル化に際しては、英語能力の向上と異文化交流が必要で、交換留学生の受け入れや短期留学を推奨することで、今後も積極的に国際交流を推進していきます。ゼミや研究報告にも一部英語発表を取り入れ、学生の英語能力の向上に努めていきます。薬友会会員の皆様からのご支援をお願い申し上げます。

主要論文

- K. Moribe, Y. Tozuka, K. Yamamoto. Supercritical carbon dioxide processing of active pharmaceutical ingredients for polymorphic control and for complex formation. *Adv. Drug Deliv. Rev.* 60, 328-338 (2008).
K. Moribe, K. Higashi, K. Yamamoto. Nano-sized crystalline drug production by milling technology. *Curr. Pharm. Des.* 19, 6246-6258 (2013).



会 員 便 り

仲井 由宣 (千葉大学 名誉教授)



光陰矢のごとし

いつの間にか私は薬学名誉教授の最年長者になった。昭和37年に東大から千葉大に移ったとき、桜の美しさにうたれ、猪ノ鼻キャンパスの田園風に驚いた。

当時日本は活況にあり医薬品でも生産の拡大が進められていた。薬学部には製剤に関する研究室が要望され、昭和42年に製剤工学教室が新設された。講義もこれまでにない内容なので苦勞したが学生諸君もさぞ難儀したことだと思う。強く記憶に残る一事がある。試験の時、用事が出来てしばらく試験室から離れたことがあった。同じ答案が出てくると思ったところそのようなこともなく、なかには合格点に達しないものもいた。この誠実さに感動し以来学生を全面的に信用するようになった。

研究室では中島新一郎先生(山梨大学名誉教授)と熱分析装置の自動化に苦勞を共にし、初めて錠剤の崩壊過程がレコーダーから出たときの喜びは忘れられない。教室が軌道に乗り始めたころ西千葉に移転することになり本格的な教育・研究が始まった。とくに添加剤との混合粉碎では薬品の奇妙な現象が次々に発見されメカノケミストリー研究の始まりとなった。

西千葉では建物や設備が格段に良くなり、やがて博士課程が出来て優れた卒業生が輩出した。山本恵司先生が研究室を受け継ぎ活発な教室の伝統を作り上げてきた。薬学はいま猪ノ鼻に御里帰りし新たな発展をしている。この3月には山本先生は定年を迎えようとしていて、まさに光陰矢のごとしである。

横山 祐作 (日本薬学会 常任理事)



西千葉キャンパスの思い出

私は、薬学部が亥鼻キャンパスから西千葉キャンパスに移転した年に入学した。受験は自然の中に平屋の校舎が点在する亥鼻の薬学部校舎で行われ、緑豊かで静かな環境での学生生活に大いにあこがれた、当時の西千葉は新しい校舎ばかりが目立ち、植栽も育っておらず殺伐とした雰囲気、ここで四年間も過ごすのかと暗い気持ちになったのをよく覚えている。

しかし、クラブ(柔道部、歴史同好会)に所属していたこともあり、多くの他学部の友人が出来、実習を通じ薬学部でも交流が深まるにつれて、我が家のように感じるようになった。卒業後の西千葉キャンパスは、自分の青春の象徴そのものであった。

卒業してから船橋にある東邦大学薬学部勤務したこともあり、西千葉キャンパスに行く機会も多かった。ほとんど変わらない母校がいつもそこにあったことは、私の心のよりどころであり、西千葉キャンパス第1期生と40年間以上もこの思いを共有できたのは、大きな喜びでもあった。

薬学部が6年制になり、教育、研究、そして薬剤師の役割も大きく変わろうとしている。薬学部は再び亥鼻キャンパスに移転し、医学部、看護学部とも近く理想的教育環境になった。これから多くの学生が、信頼される薬剤師、優秀な創薬研究者として巣立っていく事と思う。新しい千葉薬の歴史が始まるという期待感が、私の過ごした薬学部のキャンパスがなくなったという寂しさを打ち消してくれる。
(昭和45年卒業)

渡邊 泰裕 (北海道薬科大学 学長)



昭和50年に薬学部製薬化学科を卒業後、修士課程へ進み、米国留学を経て、博士課程の第1期生として再び千葉大学にお世話になりました。学位を取得した時は、すでに30歳を超えていましたので、千葉大学には本当に長きにわたりお世話になりました。博士課程修了後は、北海道薬科大学に赴任し32年の月日が流れていきました。北海道薬科大学へは、昭和57年4月に着任しました。着任日は4月8日でしたが、その日は大雪で、冬用の靴があるという当たり前の北海道の生活さえ知らず、やっとの思いで大学につくことができました。今から思えば、古き良き思い出です。北海道薬科大学では、助手、講師、助教授、教授と昇格させていただき、その都度、さまざま校務に追われる日々を過ごしてきましたが、平成23年4月に、わたしにとっては青天の霹靂で学長職を命じられ現在に至っています。北海道薬科大学は、昭和49年に石狩湾を望む風光明媚な高台(小樽市桂岡町)に設置されましたが、平成27年4月に札幌市手稲区に移転することになりました。開学して40年を経て、校舎の老朽化が進んだことに加え、今後の学園と大学の発展を見越しての判断です。新校舎の建築は順調に進んでおり、5月には講義棟、10月には実習・研究棟が完成します。移転を機に、これまで培ってきた教育研究をさらに発展できればと思っています。

(昭和57年博士課程修了)

朝比奈 真由美 (千葉大学医学部附属病院 総合医療教育研修センター 講師)



私は1980年に薬学部を卒業しその後千葉大学医学部に入学、1987年に卒業し神経内科、2005年に大学病院のリハビリテーション部、2008年からは総合医療教育研修センターに勤務しています。医学生や研修医などの医療専門職の教育を担当する部署です。現在、私が携わっているのは、1) 専門職連携教育: 医学部と薬学部、看護学部の学生と一緒に教育することで将来の医療の現場でのチーム医療が円滑に行える医療人を育成しようというプログラムです。写真は4年生の授業でグループワークの指導をしている時のものです。2) 医療コミュニケーション教育: 模擬患者に対して医学生が医療面接を行って診療技術を向上させる目的の授業です。模擬患者の育成も行っています。興味のある方は、模擬患者として活動してみませんか? 3) 医療プロフェッショナルリズム教育: 今までは自然に身に着けるものと考えられていた医療者としての態度や心構えを教育するためのプログラムです。4) 海外留学支援: 交換留学のコーディネーターや学会参加のため昨年は、韓国、中国、ヨーロッパ2回、アメリカと忙しい1年でした。医学教育の分野自体がまだ新しく、今まで行われていなかった教育内容や方法をなかなか理解してもらえないという困難さがありますが、面白い仕事であると感じています。

(昭和55年卒業)

高志 昌宏 (日経BP社 日経メディカル別冊編集部)



医学メディアでの30年

大学を出てから30年あまり、自分のはほぼ一貫して、臨床医向けの雑誌『日経メディカル』の記者として報道に携わってきた。メディアには様々な形態があり、全国ネットのテレビや新聞が全てではない。医学領域を対象とする専門性の高いメディアにとって、本当は医師もあまり詳しくはない薬について十分な知識を持っている薬学出身者は、うってつけの人材ともいえたわけだ。10年ほど前に薬学部教育は薬剤師養成に大きく舵を切ったのだが、学生一人ひとりにとっては、それ以外の可能性を排除する必要は全くないと、強く思う。その一方でいまメディアは、紙からインターネットへと、大きな変革のまっただ中にある。ネットで誰もが簡単に情報の発信者になることができ、しかも瞬く間にその情報が全世界に伝わるようになるとは、誰が想像できただろうか。新聞や出版社が身売りされるという米欧の状況は、遅かれ早かれ日本にも及ぶだろう。このような大局的な社会情勢の変動に、一個人としてあらがうことは難しい。2年前、当時『日経ドラッグインフォメーション』の編集長だった私は、薬学部の就活学生を対象とした講演を依頼された。就活中の後輩に伝えたいことは何かと改めて考えた結論が、「人生は長く、途中で何ががあるか分からない。どのような仕事に就けばよいか迷っているなら、今、自分がやりたいことをしてみなさい」だった。「では、おまえはできているのか」と問われると、返答に窮してしまうのだが。

(昭和60年修士課程修了)

渡邊 伸一 (医薬品医療機器総合機構 部長)



1990年代後半の3年間、アフリカのナイジェリアに勤務していました。治安が悪かったこともあり、勤務先の事務所と自宅は高い塀で囲まれた同じ敷地内にありました。日本では、まずないことですが、自宅から歩いて通勤していました。敷地の外を歩くことはほとんどなかったため、赴任の半年後に、ヨーロッパに行き町中を歩いたときは、開放感を感じました。

現地では日本で食べていた食材を入手することが難しかったので、休暇で帰国したときには、保存のきく食材を大量に持って行きました。日本のカップラーメンをごちそうのように感じて食べていました。停電や断水が多く、風呂場でシャンプーをしている最中に断水したときには、大声で妻を呼んで、断水用に保存していたポリタンクの水でシャンプーを流しました。熱帯地方のナイジェリアでも水でシャンプーを流すのは冷たく感じました。

アフリカに住んでいたことを考えると、日本で普通に暮らしていることをありがたく思います。アフリカの経験が役に立っている大きな一つは、われわれ夫婦が、賞味期限の切れた食材でも、全く問題ないと思えるようになったことだと思っています。

(平成元年卒業、平成21年博士課程修了)

佐々木 小夜子 (エーザイ株式会社 執行役員)



卒業してからあつという間に20年以上もの年月が経ってしまいました。最近久しぶりに我が組織に新人社員を迎えました。入社した頃、今の自分の年齢の先輩(上司)は皆オジサン、オバサンに見えたものですが、今は自分がその身。なんとも複雑な気分です。

さて、ここ4-5年、休日は、近所のスポーツクラブのゴルフレッスンにせっせと通っています。毎回フォームを修正されてしまうためコースに出るたびに微妙なショットが連発しますが、ぐっと我慢して頑張っています。お昼のビールも楽しんでいますし、気持ちよく会話を楽しみながらプレーしています。ゴルフのおかげで製剤工学的研究室の大先輩方にコンペに誘っていただき、お近づきになれました。ただ、大先輩方のコンペは平日ゴルフが基本のようで、最近なかなか参加できていないのが残念です。。

最近、運動不足のところを頑張り過ぎたからか、少し足を痛めてしまいました。ある名門コースでカートをクリックしたところ、「カートは高齢者の方用に準備しております」と言われてショックを隠せず。結局特別に使わせてもらいましたが、せっかく老後も楽しめるスポーツとして力を入れ始めたのに、老後までこの体はもつのだろうか、少し不安になっています。健康寿命って大事ですね。無理せず、ゆる〜りとレベルアップを目指します。

(平成3年卒業)

松井 真理 (国立感染症研究所 主任研究員)



現在、国立感染症研究所 細菌第二部で研究員として勤めており、主にグラム陰性菌の薬剤耐性(大腸菌、肺炎桿菌、緑膿菌、アシネトバクターなど)の解析を行っています。薬剤耐性メカニズムの解析や薬剤耐性菌の進化といった基礎的な研究だけでなく、薬剤耐性菌のタイピング・分離状況の調査や検出方法の検討など、より臨床現場に近いところで結果を求められる研究所ならではの仕事も多く、医療機関や地方衛生研究所の方々と一緒に働く中で、自分に今求められていることは何だろうと考えながら仕事を進める毎日です。

どのような分野にも「はやり」はあると思いますが、薬剤耐性菌においても同様で、新たな耐性遺伝子が年々発見され、問題とされる菌もどんどん替わっていきます。人類が何十年もかけて実用化してきた抗生物質に対しても、次々と耐性菌が出現しており、細菌の進化はすごいなあと感じています。「人類と細菌のどちらの味方をしているの」と同僚に笑われることもあります。もちろん人類の味方としてこれからも頑張っていきたいと思っています。

千葉大学には、学部生・大学院生を含め9年もの間、お世話になりました。私が過ごした西千葉キャンパスに研究室はもうないので少し寂しいですが、薬学部・薬学研究院のこれからのご発展を楽しみにしています。

(平成21年博士課程修了)

卒業生(留学生)から

廖 継思



私が千葉医科大学附属薬学専門部（以下千葉薬専と称する）に入学したのは1942年4月で、卒業したのが1944年9月だったから、日本籍で卒業した最後の台湾留学生だった。

あまり考えたことはないがあれから70年たった。

台湾から何故はるばる千葉に留学したかとよく問われるが、別に特別な意味はなかった。台湾では薬剤師を志望する学生を教育する学校がなかったにすぎない。当時日本国内でも薬学専門学校は10校あったが官立は千葉、金沢、長崎三医大の附属薬専が各50名だったほかは私立の8校が薬剤師養成の任務を負っていた。その中から少数派の千葉薬専に入れたのはいろいろな意味で幸運だった。東京に

近くて暖かく、教授も同級生もよくしてくれたので居心地もよかった。

ただ、台湾からの千葉薬専留学生は戦前を通じて僅か15名で、在学年次もとびとびなばかりか、台湾での住所も各地に分散していて、全部が一堂に集まったのは1965年に薬学部の台湾登山隊が来台したときだけだった。先輩の最年長者は大正5年卒業の潘経さんという方でかれは台湾からではなく、中国からの留学生だった。しかし日本語は流暢で後輩の面倒をよく見ていた。戦前の卒業生では私が最年少だった。

薬剤師という職業はずいぶんつぶしがきくようで、公務員、病院薬局、薬局、製薬、貿易と中々活動範囲が広い。私は病院薬局以外は大体経験した。食品や栄養方面にもかかわっている。ただ、最近の薬品の進歩をみると古い薬学の知識では追いつかない点もかなり多く、マサに生涯学習が必要なのを痛感させられる。

薬剤師になって得を思うことがある。病院でもらう薬の内容がわかること、副作用に関する情報に敏感なこと、病状や治療に対してある程度意見があることなどであろう。具体的には我が家の医療費はかなり節約している傾向がある。しかし、薬学の進歩に追いつくにはこの年齢ではかなり無理になってきた。分からない点は若い薬剤師に訊いていくほかないと感じているこのごろである。

王 昌恩



1982年から1988年まで恩師の渡辺和夫先生のご指導の下で勉強しておりました。1988年3月25日に薬学博士の学位をもらって2日後の27日に家族三人と一緒に中国に帰ってきました。帰国後、中国医学科学院・中国協和医科大学に入って教授まで働きました。1996年に中国国家自然科学基金委員会に転職して、薬物学・薬理学学科、予防医学・免疫学学科の主任を経て、中医学・中薬学学科主任教授に任されました。一年前に定年退職になっております。

帰国後、中国元日本留学生の会を積極的に推進し、中日両政府また両国の友好人士の支持と努力の下で1992年に中国留日学人帰国者の会を発足されました。私はその会の常務副会長を担当し、22年以来、“祖国建設の柱石、中日友好のかけ橋”という主旨に沿って頑張っております。2007年8月5日に母校の千葉大学の学長グループまたは学友の皆様たちの支持によって千葉大学学友会の中国支部を成立しました。“千葉大学中国校友会”の名付けとしており。私は会長に選出されています。古在元学長先生、齋藤学長先生、山本先生を始めとしての副学長方々、国際教育センターの先生方々、校友会の皆様にご指導・支持をいただいています。また、私は2008年から2013年まで千葉大学テニユア・トラックシステム評価・選考委員会委員長の山本先生の推薦によって、委員とされ、年二三回の会議の参加で大学に戻ってきたのでした。良い勉強になりました。

目下、定年退職したけれども、幾つかの大学の特任・講座教授で頻繁的な国内出張や、定期的な外来診療の出勤、書道、詩詞などの趣味、また、国のある学術賞や973、863などのある領域のプログラムの審査などの事で、けっこう忙しくて楽しい毎日です。

Satit Puttipipatkachorn



幸運なことに1987年にバンコクにある在タイ王国日本大使館に応募した日本の国費留学生に採用され、博士課程に進学することになりました。筑波大学で6か月の日本語研修の後、千葉大学の博士課程に入学しましたが、実は、それまであまり日本のことは知りませんでした。でも、先進国である日本で勉強し、タイの将来の科学や産業の発展に役立てたいと思っていました。

製剤工学研究室に来て、仲井由宣教授や山本先生はじめ、全ての皆さんが仕事でもプライベートでもとても親切にしてくれたことは一生忘れません。千葉の生活は冬は寒かったですが、とても楽しく今でも故郷だと思っています。

1991年に博士の学位をもらい、母校マヒドン大学薬学部で教員となり、現在も准教授として仕事をしています。私は日本で学んだ分子製剤学の考え方を今でも研究に役立てています。最初はタイの天然資源であるキトサンを使って医薬品含有フィルムを調製して、相互作用と物性変化について研究しました。現在の研究は経口製剤の徐放化やタイ産生薬の高品質製剤化についてですが、今までに90報の論文を発表しました。最近タイ赤十字と協力してウマ抗狂犬病免疫グロブリン・凍結乾燥製剤の橋渡し研究をやっています。2004年にアジア薬学会から石館賞を頂き光栄に存じています。今は大学の仕事以外にもタイFDAやタイ王立薬学会などでの役員の仕事もあり大忙しです。今でも千葉大学で勉強したことが、私の人生を良い方向に進めてくれたことに感謝しています。仲井先生や皆さんのお陰だと思っています。

那仁 満都拉



私は2008年3月に鈴木和夫先生にご指導いただき博士課程を修了しました。修了後、カナダ・アルバータ大学でポストドクをさせていただき、現在は中国・杭州市にある浙江大学医学部公共衛生学院で教授をしています。最近ではAs₂O₃の毒性について、主にヒ素や関連物質の代謝経路、代謝メカニズムを研究すると共に、それらの発ガンに対する効果、また得られた結果からガン抑制へも研究を進めるように努力しています。今までに著名な学術誌に31の論文を発表できたことを誇りに思っています。中でも、Metallicomics誌に掲載されたGeneration of Thioarsenicals is Dependent on the Enterohepatic Circulation in Ratsや、Chem Res Toxicol誌に掲載されたTrivalent arsenicals are bound to proteins during reductive methylationは多くのcitation数を得ることができています。2012年8月には昭和薬科大学小椋康光教授にお招きいただき、シンポジウムで招待講演「急性前骨髄球性白血病NB4細胞における無機ヒ素とその

代謝物の役割」をさせていただき大変感謝しております。2012年にはRoyal Society of Chemistry (RSC) から"Emerging Investigator" in Metallicomicsに選ばれたのも光栄なことです。メタロミクスは体を構成する元素、とくに微量元素の機能と役割を体系的に解明する研究領域で、日本語では「生体金属支援機能科学」ともいわれるオミクスサイエンスです。大学での私の紹介は以下のURLにあります。

http://www.phs.zju.edu.cn/redir.php?catalog_id=7343&object_id=8763



チュラポーン王女様来校

平成25年11月22日に、タイ王国チュラポーン王女が千葉大学に来学されました。チュラポーン王女は天然物化学の著名な研究者であり、24年12月荒野教授、西田教授、戸井田教授、山本（友）教授が訪泰した際、チュラポーン大学院大学へ招待され、大学間学術交流、学生交流協定の締結が合意されました。来学当日は大学間協定署名式、名誉博士号授与式（表紙写真）・チュラポーン王女記念講演が行われ薬学研究院からは多くの教職員、学生が参加しました。

駅伝大会で激走

平成25年10月14日に、「学長杯争奪 第8回千葉大学駅伝大会」が開催されました。秋空の下、西千葉キャンパスに作られた5区間のコースを、各チーム5人の走者が襷をつないで力走しました。薬学からは、学部3年生有志、薬化学研究室、微生物薬品化学研究室、遺伝子資源応用研究室の4チームが参加し、全31チームと競いあって、5位、9位、12位等と健闘しました。



第9回薬学部ソフトボール大会を開催

夏の恒例行事となりました薬学部ソフトボール大会（第9回）が8月27日から3日間、亥鼻グラウンドで開催されました。今回は13研究室に加えて事務職員の方々も助っ人として参加されました。炎天下で熱戦が繰り広げられた結果、最強村山軍団（薬効薬理学研究室）が6年ぶり3度目の優勝に輝きました。近年は春になると多くのチームが夏の大会に向けて練習を始めるため、ハイレベルな試合が多く見られるようになりました。ソフトボールの練習や試合を通じて体力を養い、チームワークを高めることは、研究力向上の一助となっていることと思います。今年も大会を開催する予定ですので、薬友会の皆様もぜひ試合を観戦しにお越し下さい。

香港浸會大學中醫藥學院から訪問団が来校

平成25年11月19日に香港浸會大學中醫藥學院より呂愛平院長を含む7名の訪問団が亥鼻キャンパスを訪問し、千葉大学大学院薬学研究院との間で学術交流協定を締結しました。同訪問団の一員として来日した副院長の楊智鈞先生は、1993年～1996年まで製剤工学研究室に在籍して博士の学位を取得されており、海外で活躍する卒業生との繋がりが今回学術交流協定という形で実を結びました。これを機に今後は部局間での学術交流や教員学生を含む人的交流に発展することが期待されます。



実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム

千葉大学薬学部が代表校となり城西国際大学薬学部、千葉科学大学薬学部との協働でスタートした文部科学省



大学間連携共同教育推進事業「実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」が、25年度から本格的に動き出しました。本プログラムは、「顔の見える薬剤師」として社会問題や医療問題に積極的に取り組む薬学生の養成を目指します（詳細はこちらから→<http://www.yakuzaishi-yousei.jp/>）。本年度は全5種類のプログラム中4プログラムが開講し、延べ181人の学生が受講しました。都内の小学校で医薬品適正使用啓発活動の出前授業に参加した学生からは、「最初は小学生が理解できるか不安だったが、実際授業をやってみると素直で積極的な反応がとても楽しく感じられ、自身のコミュニケーション技術の向上にも役立った」との声が得られました。



親子で学ぶ夏休みおくすり調剤体験を開催

平成25年8月2日、小中学生とその保護者を対象とした「親子で学ぶ夏休みおくすり調剤体験」を、薬学部で主催しました。小中学生とその保護者の皆さま、56名が参加され、薬局薬剤師として調剤を行うという設定のもと、処方せんの読み方、監査、チョコを用いた分包機による調剤、軟膏調剤を体験されました。白衣を着てちょっと緊張している姿、初めてみる分包機に興味しんしんな姿、ベトベトの軟膏に挑戦している姿など、小中学生の真剣な姿に、指導にあたった教

員・学生ともに多くのことを学ぶことのできた1日でした。終了後のアンケートでは、9割以上の参加者から「参加してよかった」、「また参加したい」との声をいただきました。なお、修了生には、荒野泰泰学研究院長による修了証をお渡しいたしました。

Memory at Chiba

I joined at Pharmaceutical Technology Laboratory of Professor Keiji Yamamoto from December 3rd, 2013 to January 16th, 2014. There were three most impressive things during having been there. The first was Japanese people. They took care and made me feel at home. Welcome parties and every trip where we enjoyed together were fabulous and excellent. Second was research environment. Joining this laboratory gave me an opportunity to work in equipped laboratory with effective instruments relevant to my research. Third was beautiful sightseeing of Japan. I visited many places where I was so excited and fascinated. In sum, participating the exchange program at Prof. Yamamoto's Lab not only help to broaden my perspectives and deepen my knowledge in the field, but also help to build up a good relationship and friendship between Chulalongkorn University and Chiba University.



(Wittaya Nakachon)

医専校歌、秋の逍遥歌、春の逍遥歌が千葉大学HPで聞けます！

千葉大学HPを開き「大学案内↓校友会・卒業生室↓千葉大学の歌」と進みますと、懐かしい歌のいくつかを直接聞くことができます。これは楽譜に基づいて千葉大学合唱団の皆さんの協力を得て、収録したものです。初めて聞かれる方もいるかもしれません。一度お試してください。



マツモトキヨシホールディングス寄附講座開設記念講演会開催

医薬品情報学講座は、産学連携による高度な研究および指導的人材の育成を目的に平成25年度にマツモトキヨシHD寄附講座として設立され、開設を記念し平成25年7月4日に120周年記念講堂にて3人の先生方をお招きして講演会を行いました（参加数274名、うち学生83名）。中安一

幸先生には「EMR（Electronic Medical Record）における医薬品情報提供の課題」、飯嶋久志先生には「医療アウトカムの向上と薬剤師～薬剤師職能と医薬品情報をいかに活用するか」、望月眞弓先生には「OTC薬の適正使用と副作用情報」という内容でご講演いただき、医薬品の適正使用の重要性および課題について提言を行いました。

成績優秀賞・修士論文優秀発表者が決定

博士後期課程 諏訪 映里子さん、修士課程 橋本 真理さんが成績優秀賞を受賞しました。受賞者は3月25日の千葉大学修了式において、千葉大学長より表彰されました。また、平成25年度修士論文発表会からの新たな試みとして、優秀な発表を行った学生に対して「医学薬学府長表彰 修士論文（総合薬品科学専攻）優秀発表賞」を授与することになりました。選考では、研究内容、発表内容、発表態度、質疑応答などが審査されます。平成26年3月3日、4日に行われた修士論文発表会では、みなさん例年以上に用意周到、素晴らしい発表をされており、専門外の参加者にもわかりやすい発表をした6名の学生（写真左から長谷川 友紀さん、中島 誠也さん、前田 博行さん、水野 雄貴さん、森川 貴裕さん、鰐川 雅裕さん）が優秀発表者に選ばれました。3月25日の学位授与式の際に行われた表彰式では、表彰状と記念品が授与されました。



千葉大学薬学部の教育カリキュラムに対する外部評価

千葉大学薬学部の薬学教育カリキュラムを点検・評価する目的で、平成25年7月31日に外部評価委員会が開催されました。卒業生の受け入れ先である病院薬剤部、薬局、医薬品医療機器総合機構、製薬企業の研究・開発部門、他大学薬学部の6名の方に評価委員をお願いし、書面審査、教育研究施設の視察と評価委員会での審議がなされました。今回の評価結果を新たな薬学6年制教育カリキュラムの改定に反映させることで、社会の要請にあった人材を輩出する薬学教育を推進していきます。

研究室便り

薬品物理化学

平成26年4月現在、本研究室には根矢三郎（教授）・星野忠次（准教授）・鈴木優章（助教）の職員と、博士課程学生3名、修士課程学生3名、学部6年生3名、5年生2名、4年生4名、研究生1名の総勢19名が在籍しています。研究室では、根矢教授らは生物無機化学やヘム化合物の研究を進めており、新規のヘム物質の創製ならびに特性評価について成果を出しています。最近では Org. Lett., Inorg. Chem., Chiralityなどに論文発表をしています。星野准教授らは計算化学の技法を軸に、薬物設計、設計化合物の合成、合成化合物の活性評価、標的タンパク質との共結晶X線構造解析などの研究に取り組んでいます。



分子細胞生物学

本年度は、山口教授、福本講師、山口(憲)助教、博士研究員（学振PD）、院生（博士9名、修士2名）と学部生13名が在籍し、癌細胞のシグナル伝達の研究を行なっています。この一年では、畝本力名誉教授（前身の膜機能学教室）が瑞宝中綬章を受章されました。また、石橋君、岡本（麻）さんと長谷川（仁）さん（第133回日本薬学会）、幸君（第86回日本生化学会）、青山君と幸君（第12回ファーマ・バイオフィォラム）が学生優秀発表賞を受賞しました。更に、富岡君が（第55回米国血液学会）でAbstract Achievement Awardを受賞しました。柴君は修士修了して中国に



帰国し就職しました。教室員一同頑張っておりますので、薬友会の皆様、是非お気軽にお立寄りください。

遺伝子資源応用

本年度の研究室は、教員3名（斉藤和季教授、山崎真巳准教授、吉本尚子助教）、博士研究員2名、大学院生7名（博士後期課程3名、博士前期課程4名）、学部生11名、技術職員1名、事務職員1名の計25名で構成されています。生薬に代表される植物が生産する化学成分には薬理活性や健康機能性を有する物質が多く存在します。私達はこのように植物が生産する多様な天然化合物の生合成酵素や遺伝子のゲノムレベルでの制御機構の解明とそのバイオテクノロジー応用を目的とした研究を行っています。今年度も皆で研究に励んでいきますので、薬友会の皆様の温かいご支援をお願い申し上げます。

研究室ウェブサイト

<http://www.p.chiba-u.ac.jp/lab/identshi/index.html>



環境リスク（国立環境研究所）

環境リスク研究室（平野研）は、つくば市の国立環境研究所にある健康リスク/NanoToxicology研究室を兼ねています。

研究テーマは、

1. ヒ素やセレンなど半金属の代謝機構と生体影響機構の解明
2. カーボンナノチューブ、銀粒子などナノマテリアルの毒性発現機構の解明
3. 二次生成粒子・PM2.5の生体影響

と多岐にわたっていますが、ナノトキシコロジー分野でEUとの共同研究を進めており、海外からの研究者や研究生が多く在籍しています。様々な環境有害物質と生体側とのインタラクションに伴う変化を培養細胞や実験動物を用いることにより捉え、環境中の様々な物質が生体に作用するメカニズムの解明を目指しています。そのための手段として、プラズマ質量分析器などの高感度化学形態分析、共焦点レーザー顕微鏡、原子間力顕微鏡、フローサイトメーター、遺伝子導入など様々な手法を用いています。



かずさDNA研究所（遺伝子創薬学）

遺伝子創薬学研究室は、かずさDNA研究所との連携協力講座で木更津市のアカデミアパーク内にあります。こちらでの最近の研究内容を簡単にご紹介しますと、1) 小原らは、免疫・アレルギー疾患の発症機序や診断法・治療法開発のためのゲノム解析、2) 中山らは、新しい部位特異的組み換えシステムを用いたゲノムエンジニアリング技術開発と疾患モデルマウスの開発、3) 鈴木らは、網羅的な代謝物解析による有用代謝物に関与する遺伝子と代謝物アノテーションの技術開発を行っています。それぞれのグループが協力しながら、次世代シーケンサー等を駆使して、医療や産業応用を目指した研究を行っております。また、博士課程1名が学位を取得した後に博士研究員として継続して研究に参加しております。平成25年度は文部科学省地域イノベーション戦略支援プログラム（都市エリア型）かずさ・千葉エリアの最終年度にあたりますので、研究結果のまとめに向けた取り組みが行なわれています。



た。また、当研究室薬学科5年生の佐藤史織さんが「ヒスタミンH4受容体をターゲットとする新たな難治性掻痒治療に関する研究」の発表で、優秀研究発表賞を受賞しました。写真は、学会終了後のスタッフ打ち上げ会の模様です。

分子心血管薬理学

当研究室では、循環器疾患の病態解明やそれに基づ



いた新たな治療法の開発を目指した研究を行っています。わが国では高齢化や生活習慣の欧米化により循環器疾患の患者数は増加傾向にあります。これまでたくさんの治療薬が開発され使われてきましたが、治療に反応せず改善がみられない患者さんはまだ多くいらっしゃいます。特に心臓の働きが悪くなる重症の心不全では、生命予後は極めて悪く心臓移植しか治療法がありません。病気の進行を止めるような有効な治療薬を開発して患者さんの役に立ちたいと思います。ゼロからスタートした研究室ですが、今年度は学生数も10名を超えるまでに成長しました。皆、仲良く頑張っています。

薬効薬理学

薬効薬理学研究室（旧薬品化学研究室）では、スフィンゴ脂質、プロスタノイド、肺線維症、炎症性大腸炎などを研究テーマとしております。平成26年3月現在、3名の教員と、博士課程3名、修士課程7名、薬学科5年次1名、薬科学科4年・3年次8名の学生が在籍しています。今春3月末には、博士課程1名と修士3名がそれぞれの学位を取得します。獨協大医科大学の教員、博士課程進学、製薬企業の開発職へとそれぞれの道を歩き始めます。また、米国NIHに5年間留学中であった博士課程修了者が同志社女子大薬学部の教員として帰国予定です。彼らが薬理系の研究に新しい風を送ってくれると期待しています。



生物薬剤学

生物薬剤学研究室では、現在、教員3名（伊藤晃成教授、関根秀一助教、青木重樹助教）、大学院生7名（博士課程2名、修士課程5名）、学部生（7名）の研究体制で、医薬品による毒性発現の分子メカニズムとこれに基づく毒性予測法開発に向けた研究に取り組んでいます。



研究室内では、昨年10月に国費留学生の劉聡さんが研究生として加わり、この4月より博士課程に進学しております。また11月1日付で青木重樹助教がテニユアトラック助教として就任しました。日本薬物動態学会、日本毒性学会、日本薬剤学会等において学部生、大学院生が研究成果を発表し、第57回日本薬学会関東支部大会では、修士課程1年の薄田健史君が優秀発表賞を受賞しました。今年度も、ますます研究に邁進していきたいと思っております。研究室HPをリニューアルしましたので、是非一度覗いてみて下さい。

高齢者薬剤学

平成13年の新設から丸13年を迎える高齢者薬剤学研究室の本年度のトピックは、平成25年6月に上野光一教授が「第40回日本毒性学会学術年会」の年会長を務められたことです。本学術年会は千葉・幕張メッセで3日間にわたり開催されましたが、当研究室をはじめ、実務薬学、臨床教育、生物薬剤学の学生さん計36名にもスタッフとしてお手伝い頂きました。当日は、海外11ヶ国からの参加者143名を含む1640名という学会史上最高の参加人数を記録しましたが、学生スタッフの活躍により、企画した特別講演、教育講演、シンポジウム、ワークショップ等いずれも大盛況に終わりました。

病院薬学

病院薬学研究室は、石井伊都子先生が平成24年9月に医学部附属病院教授に着任されたため、病院におられる時間は長くなりましたが、研究室の学生・大学院生の指導も益々精力的に行われています。現在、大学院生は博士課程4年生と2年生が2名ずつ、学部生は6年生、5年生、4年生が2名ずつ所属し、石井教授のご専門である動脈硬化発症機序の解明を中心に薬物治療の適正化に関する研究も活発に行っており、毎週月曜日には薬剤部と病院薬学研究室が合同でセミナー行っています。親睦旅行も合同で行い、今年は総勢40名でマザー牧場のBBQや鋸山ハイキングなど楽しいひと時を過ごしました。お近くに来られた際にはぜひお立ち寄りください。



臨床教育

平成25年度は、教員3名、事務補佐員1名、大学院生4名、6年生7名、5年生4名、4年生5名の24名です。当研究室の研究は、薬物治療などの臨床の課題を扱うため、研究の場は学内にとどまりません。様々な医療機関や研究施設と連携をもち、共同研究先の先生方や、社会人の大学院生などから、多くの刺激を受けつつ、日々研鑽に励んでいます。また、地域貢献として、平成25年8月には、「親子で学ぶ夏休み おくすり調剤体験」を、10月には「無菌製剤処理実務研修会 基礎編・応用編（千葉県薬剤師会共催）」を開催しました。これからも学外の多くの方々とのつながりを大切に、臨床の課題に取り組んでいきたいと思ひます。



実務薬学

平成25年8月より佐竹尚子特任助教が就任し、関根祐子教授、大久保正人助教と合わせ教員3名体制となりました。この3月に研究室として2回目の卒業生を社会に送り出し、平成26年度からは6年生2名、5年生2名、4年生1人と、総勢8名の研究室となりました。研究内容は、関節リウマチ患者にお



る関節置換術前後の生物学的製剤の使用に関する調査、安全な医薬品開発及び医薬品の適正使用に関する性差医療研究など臨床現場での解決すべき課題に焦点を置いています。また、教員3名ともが病院薬剤師経験者であり、薬剤師の実務と研究の架け橋となるよう日々精進しております。今後とも温かいご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

生化学

生化学教室は伊藤素行教授が赴任してから約二年が経とうとしています。平成26年度はスタッフ3名、学生13名、職員2名の計18名体制となります。留学生2名を迎えて中国語や英語が研究室内を飛び交い国際色豊かになりました。主な研究プロジェクトは以下です。1) Notchシグナルの活性制御機構の解明、2) 細胞移動制御機構の解明、3) 老化に伴う記憶低下の解明。研究材料は細胞やゼブラフィッシュ、ハエと様々で、研究分野も生化学・発生生物学・神経科学と多岐に渡ります。しかし、細胞や生物に問いを投げかけて答えを聞くシンプルな研究姿勢は共通しており、研究室員同士で切磋琢磨しながら日々研究活動に邁進しています。



薬物学

平成26年2月現在の薬物学研究室の構成は、千葉寛教授、小林カオル准教授、降幡知巳助教、大学院博士前期・後期課程11名、学部6・5・4・3年生15名、事務補佐員1名の計29名です。当研究室では、「代謝酵素とトランスポーターを基軸とした薬物動態・薬効毒性発現の機序解明とその予測法に関する研究」を進めており、その内容は25年度国内外の研究発表会において優秀発表賞等として評価されています。これは、受賞者に限らず研究室員が一丸となって日々研究に励んできた成果であります。一方、研究室内餃子パーティといった楽しい企画も大事にできました。今後、真剣に楽しく各自のさらなる飛躍を目指していきたいと思ひます。



薬化学

卒業生の皆さん、最近の濱田研は：

☆2013年5月、京都大学大学院薬学研究所から、原田慎吾博士が助教として赴任しました。

☆2013年8月、ソフトボール大会。久々、女子学生が3人在籍しているため、薬化学メンバーのみで出場できました。決勝で敗退。

☆2013年10月、西千葉で毎年行われている駅伝大会に薬化学チームで初参戦。勢いで参加したわりに善戦。

☆2014年2月、薬科学科（4年制）の3年生3名、薬学科（6年制）の3年生1名が加わりました。

これだけ読むとスポーツしかしてないみたいですが、研究でもハードワーカーが揃っています。2014年度も頑張ります。

写真：最近の研究室風景は、こんな感じです。



薬品合成化学

亥鼻キャンパスでの快適な研究環境に囲まれて、西田篤司教授をはじめスタッフ・院生の計19名で切磋琢磨しています。西田教授がリーダーを努める日本学術振興会アジア研究教育拠点事業では、千葉県誉田で国際シンポジウムを開催し大成功をおさめました。参加した大学院生の英語プレゼンテーションは実に堂々としており、アジア各国の大学院生同士で大いに刺激になったことと思います。研究面では、世界に先駆けてアルカロイドの全合成を達成しました。この研究に携わった院生は学会表彰も受けており、彼らの今後の活躍が大いに期待されます。大学が懐かしくなったら、是非お立ち寄りください。



病態分析化学

当研究室では「天然物由来糖鎖の構造と生理機能」、「ポリアミンの生理的役割」、「アクロレインの毒性機序」の解明を融合させた研究を展開しています。ようやくその緒についたばかりですが、少しずつ成果が出つつあります。最近、当研究室に配属になった3年生が、貝類、スッポンなどから珍しい糖鎖を精製しました。習得した分析技術を通して少しでも糖鎖に興味を持ってもらえたらと願い、試行錯誤しつつ毎年新しい素材を探索しています。今後も多様な素材に含まれる

糖鎖、ポリアミンなどの分析を行うと同時に、常に新しい分析手法の開発に努め、生命現象の一部を少しでも理解することに貢献できるよう精進していきたいと思えます。



製剤工学

本年4月16日に研究室同窓会が開催され、200人にも及ぶ卒業生が集まり盛大な会となりました。仲井由宣名誉教授は「卒寿」を迎えられ、ますますお元気でいらっしゃいます。山本恵司教授は「特任教授」として、引き続き千葉大学に在籍されています。昨年9月東助教がミシガン大学から1年の留学を終え帰国し、植田君（博士2年）が日本学術振興会特別研究員に採用される等の多くの成果を得ました。植田君、長谷川さん（修士2年）、設楽君（学部6年）、今井さん（学部6年）が諸学会で計7つの優秀発表賞を受賞しています。学部4年生・高橋君、小川さんがタイの大学に短期留学し、国際交流も活発です。研究室のホームページを一新しましたので、是非ご覧ください。



微生物薬品化学

2013年度もスタッフ3名と共に大学院・学部学生が日々研究に取り組みました。「第7回若手コロッセウム」では修士1年2名が発表しました。「第96回日本細菌学会関東支部総会」では学部4・6年生3名が発表し、松井優里さんが「学生優秀発表者賞」を受賞しました。11月には6年生の卒論発表が行われ、3月には国家試験を受験し、薬剤師としての一歩を踏み出します。2012年度に引き続き山本教授が世話人となり「第2回千葉大学感染症ネットワーク研究会」を開催、学内外から120名が参加し盛会となりました。このネットワークにより共同研究も活発となり、学生1名は3ヵ月間ドイツで研究しました。現在、新4年生を迎え益々研究に励んでいます。



薬品製造学

本年度をもって長らく薬品製造学研究室を主宰してこられた石川勉先生がご退職され、2月22日に最終講義・退職記念祝賀会が執り行われました。最終講義への出席者は約200人を数え、また祝賀会にも国内外から来賓の方々が駆けつけられ、大変な盛会となりました。またそれに先立ち9月14日に同窓会が催され、数多くの卒業生にご参加頂き、内輪での石川先生のご退職祝賀会にかえさせて頂きました。来年度以降は鈴木紀行准教授を中心に、ケミカルバイオロジー分野における新たな研究を展開していきます。

(研究室ホームページ：

<http://www.p.chiba-u.ac.jp/lab/seizou>)

写真：(平成25年9月、同窓会にて)



生体機能性分子

25年度は博士課程5名、修士課程14名、学部6年生1名、学部4年生5名の計25名の学生が在籍し、含窒素化合物をターゲットにした合成研究、成分探索研究、医薬化学研究に取り組み、多くの成果を上げました。その一つとして、昨年11月に京都で開催された第5回食品薬学シンポジウムにおいて、学部6年の岡部慧くんが発表題目「フキ (*Petasites japonicas*) に含有されるピロリジジナルカロイド類の検索研究」で優秀発表賞を受賞しました。

22年に博士課程を修了したMario A. Tanが再来日し、26年1月から3か月間、博士研究員として滞在しました。

25年度のD3(西山裕之)の学位論文題目は「広範な有効域を有するColchicine系抗腫瘍薬の創製研究」です。修士論文の題目などにご興味のある方は研究室のHPをご覧ください。



分子画像薬品学

研究室のTopics

本研究室は、4名の教員と博士課程3名、修士課程6名、学部学生7名、秘書1名の総勢21名で構成されています。昨年5月から花岡助教は米国国立衛生研究所に留学しており、3月に帰国します。本研究室では、がんの早期診断や治療効果の早期判定を目的として、細胞内の生理学的、生化学的変化の非侵襲的な画像化が可能なアイソトープ標識薬剤や、がんのみを放射線

で照射するアイソトープ治療薬剤の開発研究を進めています。最近話題となっているTheranosisのための分子プローブの開発研究です。コンパ、研究室旅行、秋のソフトボール大会を楽しみつつ、日々研究活動に励んでおります。OB/OGの皆さま、お時間がありましたらお立ち寄り下さい。



活性構造化学

活性構造化学研究室では科学研究費の支援により平成20年度よりバングラデシュ天然薬物資源調査を行っている。年に一度石橋がバングラデシュを訪問し、これまでに5回野外調査を行った。現地カウンターパートはクルナ大学薬学部のシャミール・サドゥー教授とダッカ大学薬学部のフィロジュ・アーメド教授であり、二人とも活性構造化学研究室で博士の学位を取得した卒業生である。平成25年度は当初12月初めに訪問する予定であったが、バングラデシュ総選挙前の政情不安のため訪問を延期し3月下旬に訪問することになっている。これまでに数百種の植物種を採取し、当研究室の生物活性スクリーニングに活用しておりよい成果が得られてきている。



医薬品情報学(マツモトキヨシホールディングス)

皆様からのご支援のもと環境が整い、昨年度から時間をかけて準備していた研究プロジェクトの順次実施が計画されております。例えばマツモトキヨシホールディングス様からお借りした電子薬歴ビッグデータによる調査、医学部附属病院薬剤部と薬業連携における課題と解決についての調査、他大学と協同で進めているイラスト等により情報を利用者に理解しやすくしたOTC薬添付文書の作成、および外部法人と協同で取り組んでいる地域在宅医療に携わる薬剤師のコミュニケーション能力向上のための教育プログラム開発等があります。今年度から薬学科4年生2名も加わります。研究の結果を学会や査読論文投稿の形で発表できるよう日々努力しております。



クラス通信

昭和20年卒業（るつぽ会）

新緑の頃昨年6月29日るつぽ会を東京綾瀬の江戸一万来館で開催しました。出席者は5名、坂本、細川、水橋、横田、佐川です。遠く青森から駆けつけるメンバーもあり、お互いに高齢ですが、60数年前の懐かしい教授や授業の思い出、フスマの多く入った戦時中の食事や船橋、船堀両工場への勤労働の思い出話は尽きず、気分も自然に若返りました。

名月赤城月や影を慕いてカラオケに浸り近況を互いに発表、我々の年齢には何らかの不具合を持ちながら不屈の精神で克服している現状で世の為、人の為に頑張る意気でした。カラオケが盛り上がったところで、恒例の“秋の直遙歌”の合唱となり、元気で再開を祝しました。坂本君からの弘前の名酒“蔵子”の差し入れありがとうございます。

尚、るつぽ会員が米寿を迎えたお祝いとして、今回、銀製の耳搔きを謹呈（宮内庁御用達上田銀器製）、会員にお送り申し上げ、祝電を戴いた千葉大学薬友会長宛にも謹呈申し上げました。縁起の良い銀製耳搔き、ご承知の通り銀イオンは抗菌作用があり、最も優れた耳搔きと自賛しております。



（佐川 安寿）

昭和23年卒業

平成25年のクラス会は5月11日に恒例の新橋「新橋亭」で開催。一昨年のクラス会は5名の出席者と余りにも淋しかったので、昨年のこの欄から健康で欠席された方々の氏名を列記して出席を呼びかけたのが良かったのか今回は下記の11名の参加を得る事が出来た。矢張り人数が多いと話題も豊富になり活気が出ます。特に新潟から高橋君、又数年振りの豊田君が付き添いつきで出席された事は幹事として大変嬉しく感謝する次第。欠席者の中に食事の件で中華が駄目な人も居り店を変える事も考えてみたが、老齢に成ると交通経路の変更や新規の店を探すのは面倒くさい、やはり馴れた所が良いとの意見も多く幹事として苦慮しておる所です。又今回も悲しい『訃報』が3件あり。保田正夫君（25年8月）、岡田次男君（25年9月4日）、井上富夫君（26年1月18日）特に井上君は薬友会の亥鼻会の主幹事を永らく務めた。3君のご冥福を心から祈る。



写真、
前列左より長谷川、大塚、植草、小林、豊田
後列左より三浦、古橋、高橋、小沢、清水、青柳
（三浦 清）

昭和24年卒業

戦後一期生の思い出

私ども昭和24年度卒業生は敗戦後最初の入学生である。私のような田舎中学4年卒の子どももいれば、軍の学校からの転入生も多く、なかには大陸の戦野から復員し、復学された方もおり複雑な構成だったが、仲良く過ごした実感はある。

しかし空腹と列車の混雑はひどいものだった。あまり殺伐な生活なので、野球、卓球などのスポーツ、囲碁、将棋等すべての遊びのクラス内対抗戦をやるうと発案した者がおり、私が東京から通学している友達に野球に加わるよう勧めに行ったら絶対いやだと言うので難詰したら、「俺は秋葉原での乗り換えの時、階段で一回休まないといけない、その俺に野球をやれと言うのか」と言われたのは、今でも鮮明に覚えている。そして国家試験の第一回生でもある。東京はまだ焼跡だらけ、製薬業も復興せず、ひどい就職難だった。そんな苦しい時代を生き抜いた友も少なくなり、消息の分っている同級生は二〇人をきり。昨年畏友牛島君の訃報に接した。合掌（酒井 正嘉）

昭和25年卒業

今年は原稿メ切2日前の2月23日（日）角屋君の世話でクラス会（恒例の新橋、新橋亭。午餐）を開催。出席者は東京（角屋）、神奈川（石井、松本宏、勝又）、埼玉（佐子）、千葉（鈴木）の6名。小人数だけに談論風発、健康、養生、介護、長寿、終焉の備え、欠席者10名の近況など心通うものだった。そして、卒後65年の今回のクラス会をもって所謂公式の会合は終わりとし、今後は有志の呼掛けによる三三五五の交遊を適宜続けてはどうかということになった。

物故者は一昨年現在17名を数えたが、この一年間訃報は皆無で何よりであった。現存者16名。大概是84歳。長老は卒寿。米寿±の友もいる。皆電話で連絡がつく。

今冬の厳寒、降雪はかなり身に堪え、被害に遭っていてもいるが、皆よく頑張っている。

特に療養中の諸兄、ご家族にはご自愛専一、櫻花の候には緩解されるよう祈ります。

写真：左から後列 勝又、角屋、石井
前列 佐子、松本、鈴木

（鈴木 昭治郎）



昭和28年卒業（千葉薬28会）

平成25年の同期会は今年が卒業60周年になるので、そのお祝と今後の会の運営について相談する事に致し、恒例の会場を離れ、千代田区KKRホテル東京日本料理「たけはし」に移し、今後の会をどうするかということを予告した案内状が刺戟したのか、新井、大島、尾中、亀田、北野、岐部、坂口、進藤、高橋、林と遠路はるばるバンクーバーから参加した桑原君の計11名が出席、盛大な会になりました。

想い出話と今後をどうしようかと、想い出話もからんで、結局誰言うともなしに、集まろうと云い出したら、電話で連絡し合って集めれば会が出来ると云うことで続け様と言うことになりました。

学部だより

教員の異動 (2013年5月1日～2014年4月1日)

25. 5. 1	採用	原田 慎吾	助教 (薬化学)	26. 4. 1	採用	樋坂 章博	教授 (高齢者薬剤学)
25. 11. 1	採用	青木 重樹	助教 (生物薬剤学)	26. 4. 1	昇任	森部久仁一	教授 (製剤工学)
26. 3. 31	定年退職	石川 勉	教授 (薬品製造学)	26. 4. 1	採用	山本 恵司	特任教授
26. 3. 31	定年退職	上野 光一	教授 (高齢者薬剤学)	26. 4. 1	配置換	加川 夏子	助教 (薬品製造学)
26. 3. 31	定年退職	山本 恵司	教授 (製剤工学)			環境健康フィールドセンター	講師へ

2014年度薬学部入学者の状況

入学者83名 (男32名、女51名：推薦10名、前期60名、後期11名、帰国子女2名)

出身高校一覧

4名 渋谷教育学園幕張 (千葉)
3名 県立千葉 (千葉)、小石川 (東京)、浜松北 (静岡)
2名 川越 (埼玉)、薬園台 (千葉)、東京学芸大学附属 (東京)、豊島岡女子学園 (東京)、戸山 (東京)、雙葉 (東京)、本郷 (東京)、フェリス女学院 (神奈川)、横浜翠嵐 (神奈川)
1名 Langley High School (アメリカ)、Clear Lake High School (アメリカ)、札幌北 (北海道)、札幌西 (北海道)、牛久栄進 (茨城)、土浦日大 (茨城)、宇都宮女子 (栃木)、前橋女子 (群馬)、市立浦和 (埼玉)、浦和第一女子 (埼玉)、浦和明の星女子 (埼玉)、春日部 (埼玉)、春日部共栄 (埼玉)、川越女子 (埼玉)、栄東 (埼玉)、佐倉 (千葉)、佐原 (千葉)、昭和学院秀英 (千葉)、千葉東 (千葉)、東京学館浦安 (千葉)、東邦大学付属東邦 (千葉)、東葛飾 (千葉)、上野 (東京)、江戸川女子 (東京)、大妻 (東京)、お茶の水女子大学附属 (東京)、開成 (東京)、学習院高等科 (東京)、小山台 (東京)、女子学院 (東京)、竹早 (東京)、筑波大学附属 (東京)、東京学芸大学附属国際 (東京)、西 (東京)、日比谷 (東京)、三田 (東京)、浅野 (神奈川)、厚木 (神奈川)、洗足学園 (神奈川)、桐光学園 (神奈川)、三条 (新潟)、片山学園 (富山)、県立長野 (長野)、松本深志 (長野)、沼津東 (静岡)、旭丘 (愛知)、豊橋東 (愛知)、南山 (愛知)、明和 (愛知)、立命館 (京都)、青雲 (長崎)、鶴丸 (鹿児島)

2014年度大学院医学薬学府入学者の状況 (4月入学者)

修士 (薬学領域) 入学 49名：総合薬品科学専攻49名

博士 (薬学領域) 入学 22名：先端医学薬学専攻 (4年制) 9名、先端創薬科学専攻 (3年制) 13名

薬剤師国家試験合格状況

平成26年 3月1、2日実施

新卒者合格率 88.1% (37名：88.1%は全国73大学中、5位の成績です。)

2013年度 卒業生・修了生の進路

学部4年制 45名

進学 45名 : 千葉大学44名、東京大学1名

学部6年制 42名

進学 1名 : 千葉大学

病院 13名 : 豊田厚生病院、田上病院、長門記念病院、藤田保健衛生大学病院、亀田総合病院、高島平中央総合病院、入間川病院、千葉徳洲会病院、千葉友愛会記念病院、千葉大学医学部附属病院 (2名)、船橋市立医療センター、順天堂大学医学部附属病院

企業 20名 : (株)イービーミント、中外製薬(株)、イービーエス(株)、徳永薬局(株)、ゼリア新薬工業(株)、協和発酵キリン(株)、ひかわ調剤薬局、クインタイルズ・トランスナショナル・ジャパン(株)、(株)杏林堂薬局、日本調剤(株)、薬日本堂(株)、アステラス製薬(株)、(株)ヤクルト、(株)ハーモニー薬局、ウエルシア関東(株)、(株)エルシーグループ、日本メディカルシステム(株)、(株)アインファーマシーズ、トーア・エイヨー(株)、(福)聖隷福祉事業団

公務員等 6名 : (独)医薬品医療機器総合機構 (3名)、千葉県病院局、東京都 (2名)

未定 2名 :

修士修了 45名

進学 11名 : 千葉大学11名

企業 31名 : 第一三共RDノバル(株)、オリオンビール(株)、日本ジェネリック(株)、高田製薬(株)、(株)三和化学研究所 (2名)、パレクセル・インターナショナル(株)、清水メディカル(株)、(株)クレハ、日本農薬(株)、東レ(株)、日医工(株)、富士フィルムファインケミカルズ(株)、(株)大塚製薬、(株)陽進堂、(株)メディサイエンスプランニング、第一三共(株)、アステラス製薬(株) (2名)、花王(株)、ゼリア新薬工業(株)、持田製薬(株)、佐藤製薬(株)、白鳥製薬(株)、王子ゴム化成(株)、ヒノキ新薬(株)、テルモ(株)、グラクソ・スミスクライン(株)、Meiji Seikaファルマ(株)、(株)京仁洋行

公務員等 1名 : (独)医薬品医療機器総合機構

未定 2名 :

博士修了 13名 : 千葉大学医学部附属病院 (2名)、獨協医科大学、千葉科学大学、新疆医科大学 (中国)、Ohio State大学 (アメリカ)、エスエス製薬(株)、アステラス製薬(株)、第一三共(株)、東レ(株)、持田製薬(株)、藤本製薬(株)、(株)ヤクルト

今年度の受賞記録

(平成25年1月～平成26年3月)：教員の受賞(共著を含む)を掲載

平成25年1月	日本薬学会近畿支部奨励賞(日本薬学会近畿支部) 原田慎吾(薬化学)
平成25年2月	NUTRI Young Investigator Award 2013(第28回日本静脈経腸栄養学会学術集会) 竹田真理子、渡辺健太、福本泰典、有吉範高、石井伊都子ほか13名(病院薬学・医学部附属病院薬剤部・分子細胞生物学)
平成25年3月	優秀発表賞(第86回日本細菌学会総会) 庄司竜麻、高屋明子、佐藤慶治、山本友子(微生物薬品化学)
平成25年5月	旭化成創剤研究奨励賞(日本薬剤学会) 森部久仁一(製剤工学)
平成25年5月	優秀論文賞(日本薬剤学会) 池田保夫、東頭二郎、森部久仁一、山本恵司(製剤工学)
平成25年9月	学長賞(千葉エリア産学官連携オープンフォーラム2013) 降幡知己(薬物学)
平成25年9月	Best Poster Award(The 10th International Symposium on Agglomeration) 長谷川友紀、東頭二郎、森部久仁一、山本恵司(製剤工学)
平成25年10月	学生優秀発表賞(第96回日本細菌学会関東支部総会) 松井優里、高屋明子、佐藤慶治、山本友子(微生物薬品化学)
平成25年10月	優秀発表賞(第56回日本薬学会関東支部大会) 林みなみ、根本哲宏、濱田康正(薬化学)
平成25年10月	優秀発表賞(第56回日本薬学会関東支部大会) 薄田健史、関根秀一、荻村栄一郎、堀江利治、伊藤晃成(生物薬剤学)
平成25年10月	優秀発表賞(第56回日本薬学会関東支部大会) 設楽竜平、壬生総子、東頭二郎、森部久仁一、山本恵司(製剤工学)
平成25年11月	JSPS Asia Core Program Lectureship Award(9th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia) 西田篤司(薬品合成化学)
平成25年11月	優秀発表賞(ポスター発表)(第5回食品薬学シンポジウム) 岡部慧、小暮紀行、北島満里子、高山廣光(生体機能性分子)
平成26年2月	平成25年度優秀発明賞(千葉大学) 西田篤司、中村浩之、村山俊彦(薬品合成化学・薬効薬理学)
平成26年2月	有機合成化学協会研究企画賞(有機合成化学協会) 根本哲宏(薬化学)
平成26年3月	Plant & Cell Physiology論文賞(日本植物生理学会) 山崎真巳、斉藤和季ほか10名(遺伝子資源応用)

薬友会より

薬友会ホームページURLは随時更新しています。今までの薬友会報が閲覧できるとともに、住所変更などもここからメールで連絡できます。

<http://www.p.chiba-u.ac.jp/yakuyukai/>

平成25年 活動実績報告

- 3月 新入生入会案内(新規終身会員101名)
- 5月 薬友会報23号発行
- 7月 薬友会役員会・常任理事会および第22回千葉大学薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会 開催(薬学部120周年記念講堂)
「The創薬-基礎から患者へ」(講師4名、参加者190名)
- 12月 役員会・常任理事会

平成26年 活動予定

- 3月 新入生入会案内
- 5月 薬友会報24号発行
- 7月 役員会・常任理事会および第23回千葉大学薬友会生涯教育セミナー
- 12月 役員会・常任理事会、総会

お知らせ

薬友会のさらなる活性化のために、終身会員加入とご寄付をお願い申し上げます。

- 1) 終身会員：会費2万円、昭和48年に開設(2013年、加入率約74%)。会員名簿CDを更新のたびに無料で配布します。

- 2) ご寄付：一口2千円から随時受付けています。とくに、終身会員会費が1万円であった会員のみなさまのご協力をお願い申し上げます。同封の払込用紙の通信欄に、「終身会員」あるいは「寄付」と明記のうえ、氏名、住所、卒業年度をご記入いただき、<郵便振替口座00150-5-551796 千葉大学薬友会>にお願い申し上げます。

平成26年度各種委員会名簿

(○印、現委員長。前委員長はアドバイザーとして参画)

総務委員会 ○村山俊彦、藤野裕道、中村浩之、村上泰興(S36)、根矢三郎(前委員長)

財務委員会 ○山本友子、高屋明子、佐藤慶治、村上泰興(S36)、濱田康正(前委員長)

名簿委員会 ○高山廣光、北島満里子、小暮紀行、村上泰興(S36)、戸井田敏彦(前委員長)

事業委員会 ○濱田康正、根本哲宏、原田慎吾、渡辺 楷(S33)、佐藤信範(前委員長)

会報委員会 ○山本恵司、森部久仁一、東頭二郎、渡辺 楷(S33)、加藤文男(S47)、角田範子(S52)、西田篤司(前委員長)

第23回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

日時：平成26年7月12日（土） 13：00～17：20

場所：千葉大学薬学部120周年記念講堂
（医薬系総合研究棟 II 期棟 1階）
（〒260-8675 千葉市中央区玄鼻1-8-1）

主催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会

共催：日本薬剤師研修センター（参加者には日本薬剤師
研修センターより単位が認定されます。）

テーマ：「創薬・医療の最前線 - 基礎から患者へ」

1) 「新規2型糖尿病治療薬イプラグリフロジンの創薬研究」

高倉 昭治 先生

（アステラス製薬(株)研究本部 主管研究員）

「最近、本邦で許認可を取得しました新規作用機序（SGLT2阻害作用）を有する2型糖尿病治療薬イプラグリフロジンについて その創薬の経緯、薬理作用ならびに臨床効果について紹介いたします。」

2) 「新しい抗凝固療法時代の幕開け：経口FXa阻害剤エドキサバンの研究開発」

森島 義行 先生（第一三共(株)、研究開発本部 研究統括部 生物医学研究所 第二グループ長）

「半世紀以上、経口抗凝固剤としてはワルファリンのみが使用されてきましたが、最近、新しい経口抗凝固剤が相次いで発売されました。本講演では、その中で唯一の日本発の製品であるエドキサバンの研究開発を紹介いたします。」

3) 「次世代抗体を中心とする協和発酵キリンの抗体医薬研究開発戦略」

秋永 士朗 先生（協和発酵キリン(株) リサーチフェロー）

「抗体医薬とは、生体がつ免疫システムの主役である抗体を主成分とした医薬品です。成人T細胞白血病リンパ腫に有効な最先端の抗体医薬ポテリジオの研究開発の紹介です。」

4) 宮木高明記念講演：「多能性幹細胞を用いた神経疾患の再生医療と病態研究」

赤松 和土 先生（順天堂大学医学部ゲノム再生医療センター 特任教授）

「iPS細胞を用いる再生医療と疾患iPS細胞を用いた創薬研究についての最新の解説です。」



・JR千葉駅、京成千葉駅到着後、JR千葉駅東口正面7番のバス乗り場から「千葉大学病院」行きバス、または「南矢作」行きバスに乗り、「千葉大学薬学部前」で下車。約15分。

セミナー参加費 1,000円（事前予約） 1,500円（当日）

参加申込み方法 同封または郵便局備え付の払込書にて下記の郵便振替口座に参加費を送金ください。
払込書の通信欄に、氏名、住所、卒業年度を必ずご記入ください。

[事前予約締切：平成26年7月1日（火）]

郵便振替口座：00150-5-551796 千葉大学薬友会

本セミナーに関するお問い合わせは薬学研究院（薬化学研究室） 濱田康正までお願いいたします。

（電話/FAX：043-226-2920、 E-mail：y-hamada@faculty.chiba-u.jp）

生涯教育セミナーへのご招待：本年度は薬学部卒業後35年の1979年（昭和54年）3月、卒業後45年の1969年（昭和44年）3月に卒業された方々をご招待いたします。該当されます皆様は、当日受付係にお申し出ください。

薬学部見学のご案内：卒業生と一緒に参加される小・中・高校生および大学生については参加費無料といたします。また、ご希望があれば医薬系総合研究棟 I・IIをご案内いたしますので、事前にお申し込みください。この機会に是非母校に足を運ばれ、新棟が建つ玄鼻キャンパスで旧友と久しぶりの一時をお楽しみください。

一般参加者のご来聴：卒業生のみならず一般の参加者も歓迎いたしますので、奮ってご来聴ください。

編集後記

薬友会報の創刊は1991年ですが、はや24号となりました。「思えばいと疾し」というのは卒業式の歌ですが、本誌も皆様のご協力により歴史を刻むまでに成長しました。これまでの会報は、「薬友会報バックナンバー」[\[検索\]](#)、で全てをご覧になれます。本誌の編集委員長は、研究室単位で約20年に一度の持ち回りで行われてきています。創刊号から3号までは、まだ若かった私が担当させていただきましたが、計らずも私の定年の年に、再度編集委員長が回って来ました。初心に帰って、編集委員の皆様と相談し、少し形を変えて編集してみました。良い方向に向かっているならば、幸いです。悪いとの評価の場合もご意見お寄せ下さい。今後の改善に結び付けられます。これからは国立大学受難の時期を迎えます。ステイクホルダーからの意見を大学運営に反映することが求められています。千葉大学薬学部を積極的に支援する同窓会、前向きに物言う同窓会に変身する方策を考える良い機会かもしれません。（山本 恵司）

薬友会報24号編集委員会

山本恵司（委員長）、森部久仁一、東颯二郎、植田圭祐、戸井田敏彦（次期委員長）、西村和洋、東恭平、渡辺楷（S33）、加藤文男（S47）、角田範子（S52）、西田篤司（前委員長）